

考察をすすめる。

第一章 芥川龍之介の自殺と「聖家族」

堀が師と仰いだ芥川の自殺は、昭和二年七月である。堀が本格的作家活動をはじめた以前のことである。芥川と同業の作家をめざす堀にとって、その師の敗北とも評された入死がいかにか大きな問題であるかは言うまでもない。芥川との出会いは、大正十二年、室生犀星に介されてである。その時、芥川は手紙で、

あなたの捉へ得たものをはなさずに、そのままずんずんお進みなさい。(中略)わたしは安心してあなたと芸術の話の出来る気がしました。

と非常に好意を示している。共に下町気質という線の細やかさが二人をより近づけたのであろう。芥川が堀の中に自分と近いものを感じていたと同様、堀もまた、芥川の中に自分に近いものを感じていたといえる。それは堀の卒論である「芥川龍之介論」の書き出しに、芥川龍之介を論じるのに僕にとって困難であります。それは彼が、僕の中に根を下してゐるからであります。

とあることで解かる。だからこそ、堀にとって芥川の入死はなんとしても解決せねばならない問題であったはずである。その解決の試みが、堀の卒論「芥川龍之介論」である。

僕が此処で論じたいのはいかに彼の芸術が僕の中に根を下して行つたか、そしてまたいかに彼の芸術が彼自身をしてあのやうな悲劇的な死に到らしめたか、と云ふ事であります。(卒業論文 昭和四年)

この論文は、以後堀の生涯のテュマ入死と生Vへの深い洞察の出發

点ともいえるものではなからうか。

論文の中で堀は、芥川を自殺に追いやったものは芥川の中に同居していた次のものであるとしている。

○鋭い理性と柔かい心臓の不調和。

○彼の本に対する情熱が生んだ「雑騒さ」の不調和。

○告白嫌いなメリメ型の人間でありながら、告白好きなストリンドベリイ型の人間に近づこうと彼自身への逆逆を行なつた。

つまり、入鋭い理性Vと入柔かい心臓V、入メリメ型氣質Vと入ストリンドベリイ型氣質Vのように芥川の中に全く相反する、電気の両極のごとき触ればたちまち触発するようなものが共存していたことに芥川の悲劇の原因があるのだと指摘している。まさしく、芥川の死をみつめながら書かれた論文である。と同時に、その入死Vを堀自身の問題として解決したことも述べられている。

芥川龍之介は僕の眼を「死人の眼を閉ぢる」やうに静かに開けてくれました。

この象徴的な文章は、すぐに堀の本格的小説の第一作と言える「聖家族」(昭和五年)の冒頭に結びつく。

死があたかも一つの季節を開いたかのやうだった。

「聖家族」の中で堀は完全に芥川の入死Vをのりこえているのである。入死Vという問題をみつめることによって堀自身の入生Vを認識したと云える。

「聖家族」の登場人物は、芥川を思わせる入九鬼V、堀を思わせる入河野扁理V、そして入細木夫人Vとその娘入絹子Vである。扁理と細木夫人と絹子は、入九鬼の死Vに媒介されて近づいている。

さらに、扁理は九鬼を裏がえにしたような青年として描かれてい

る。一銭銅貨の表と裏のような生と死の関係が、扁理と九鬼におきかえられている。それはつまり、堀と芥川の生きかたに置きかえられると思う。

堀は、「芸術のための芸術」（昭和五年）というエッセイの中で自分の先生の仕事を模倣しないで、その仕事の終わったところから出発するもののみが、真の弟子であるだろう。

と書いている。「聖家族」はまさしくこの言葉の実践と云える。△死▽から△生▽・△死▽をみつめることによって、その裏側にあるところの△生▽をより生き生きと感じるということ。芥川と同じ気質を持った堀がみつけた——いかに死の誘惑からのがれるか——という問の答がここにあると思う。芥川の終わったところの△死▽からスタートし、芥川と全く逆の方向に、つまり△生▽へ向って歩みはじめたと云える。そこでエッセイで述べたように、芥川の真の弟子たらんとした堀の姿がある。堀自身、生きんとして△死▽に裏づけされた△生▽の理念をつかんだと云える。

第二章 リルケと「風立ちぬ」

芥川と同様、堀の△生と死の意識に対するリルケの影響は大きく評価されているが、それは単に影響と言えないのではなからうか。堀は、ブルーストを知る以前にブルースト的であったと同じように、リルケを知る以前に多分にリルケと共通した面を持っていたと云える。リルケとの出会いによって、堀の△生と死▽の理念がよりはっきりとした型をとったと言うべきだと思う。

リルケのことが堀の文章に出てくるのは、岩波書店版の「芥川龍之介全集月報」第一号（昭和九年十月）に書かれた「高原にて」（

原題「追分にて」）である。芥川の思い出を述べたこの文章の中でリルケの「マルテ・ラウリッツ・ブリッグの手記」に触れている。主人公デンマアクの若い詩人が、巴里で死を前にしながら書きつづった、その凄惨な感じのうちに一脈の言ひしれぬ *sweetness* を湛へた手記を読んでゐるうち、私はしばしば芥川さんの「歯車」を思い浮べてゐた。

それまでは芥川の悲劇を通して見つめられていた△死▽がここでリルケを通して見始められたと言えるのではないだろうか。リルケの中に芥川との共通な面を見出したのではなく、堀自身が求めていた△生と死▽のより深い理念をリルケの中に感じはじめた時からリルケへの傾倒がはじまっていると言える。

リルケとともに、そしてリルケを通して思索することは（特に「死」について）私は言葉に云へぬほど気持ちがいい。

これは、昭和十五・六年頃の日記の中にある文章であるが、リルケへの共鳴ぶり、特に△死▽の観念への共鳴ぶりの大きいことを語っている。堀自身、結核にかかり常に死を身近に感じ続け、また母の△死▽を見つめつづけていた堀の前に、はっきりと△死▽の意識を展開させたのがリルケの作品「マルテの手記」「レクキエム」「ドワイノ悲歌」である。

リルケは「マルテの手記」の中で、△死▽△存在▽といった問題を求めようとして、マルテを△生▽のぎりぎりの場所、すなわち△死▽のすぐ隣りに立たせている。これ以上、生きていくことができなにかのようにみえる絶望のところから△生▽への意志を生まれさせている。この理念は、堀の△生と死▽の意識にびったりと重って

いる。

が、相異点がある。堀は自ら生きんとして△死▽をみつめてい
る。△生▽への意識が強かったと言える。リルケの作中から感じら
れるものは△死▽の苦甘さのようである。堀のノートの中に

彼 (Rilke) は死の詩人でした！

と断言するかのよう書かれている。堀は、△死▽の意識の部分で
は、リルケと重ったが、△生▽への意志はリルケよりもより強かつ
たと言える。△死のすぐ近くにありながらそこで生きんとした作家
堀は不思議な生命力を感じさせる。

風立ちぬ、いざ生きめやも

このヴァレリーの詩句をエピグラフにして書かれた小説が『風立ち
ぬ』である。その中には、「聖家族」「恢復期」「美しい村」と堀
が求め続けた△生▽の意識の深まりがある。そして△生▽に関する
二つの試みがなされている。一つは、「聖家族」以求求め続けてい
る△生▽、すなわち

普通の人々がもう行き止まりだと信じてゐるところから始まっ
てゐるやうな(略)生の愉しき。(「風立ちぬ」より)

である。もう一つは、昭和十四年の新潮社版の「『聖家族』序」に
書かれてる△新しい生▽ということである。△新しい生▽とは、「
七つの手紙」(昭和十三年)に記されている、

われわれの生はわれわれの運命以上のものである。
ということである。

『風立ちぬ』は昭和十一年九月頃から書きはじめられ、十三年三
月に脱稿した作品である。その中の五章を創作順にあげると、

「序曲」昭和十一年「改造」十二月号

「風立ちぬ」 同右

「冬」 昭和十二年「文芸春秋」一月号

「春」 昭和十二年「新女苑」三月号

「死のかげの谷」 昭和十三年「新潮」一月号

となる。「春」から「死のかげの谷」の発表まで十ヶ月のひらきが
ある。「春」の章を書き上げた後、終章を書きなやんでいた堀は、
リルケの「レクキエム」を読んでいるうちに、終章を書きたくなり一
気に書き上げたのである。「死のかげの谷」は『風立ちぬ』の中心
をなすものであり、それだけにリルケの——特に「レクキエム」の
——影響は大きい。

この作品は、堀の許婚者、矢野綾子との死を前にしての愛の日々
がモデルとなっている。この作品に流れているものは△生▽の悲願
のようである。△死▽を目の前にしている許婚者を見守りなが
ら、共に△風立ちぬ、いざ生きめやも▽と願った堀の心情を感じ
る。八ヶ岳のサナトリウムで、一見絶望的と思われる△死▽の間近
かで過しながら△生▽を確信してゆく二人の愛が描き出されてい
る。

いつもと少しも変らない日課の魅力を、もっと細心に、もっと
緩慢に、あたかも禁断の果実の味をこっそり愉みでもするやう
に味はおうと試みたので、私達のいくぶん死の味をする生の幸
福はその時は——そう完全に保たれた程だった。

△死の味のする生のたのしさ▽こういった表現が幾度もくりかえさ
れている。

「冬」の章で許婚者は死んでいく。「死のかげの谷」の章では、
その許婚者節子へ語りかけるように書かれている。

……こんな風におれがいかにも何気なきさうに生きてゐられるのも、(中略)本当にみんなお前のお蔭だ。

これは、リルケの「レクキエム」の終りの部分にそっくり重なっている。

帰っていらっしやるな。もしお前に我慢ができたなら、死者と供に

死んでいらっしやい。死者にはたんと仕事がある。

が、私に助力して下さい、それがお前の気を散らさない範囲で、

遠方のものが屢ら私に助力してくれるやうに、私の裡で。

この重なりは、単に模倣と言えない。リルケに出会う以前から堀の中に内在していたものが、リルケの意識に触発されて出てきたにすぎない。最愛の人を失い、その△死▽と闘っている時に「レクキエム」を読み、レクキエムのものを書きたいと願ひ創作したのである。「レクキエム」との重なりは、何ら『風立ちぬ』の作品的価値を低めるものではない。

『風立ちぬ』は、△死▽を越えたところの永遠の△生▽を、愛を媒体として結晶させ、堀の言う△運命以上の生▽への昇華をテーマとした作品である。リルケは△生▽と△死▽を対立化させ△永遠の生▽を見つめることを堀に確信させたと云える。堀のリルケノートの中で「ドゥイノ悲歌」について触れた部分に

それ(悲歌のこと―筆者註)はその(Requim)のやうに死をして全篇を支配せしめない。それは死から湧きおこり、それを遂に征服するところの賛歌(Lyrimie)である。Rilkeは死の単なる歌い手でなく、それを生に従属せしめやうとしてゐるの

だ。Rilkeは死をその作品の真中に置いた。それは死が存在の真只中にあるからであり、(下略)

とある。堀がリルケについて述べたこれらの言葉はそのまま堀自身について述べていると云える。△死▽を△生▽に従属せしめやう▽とし、作品に実現したのは実に堀なのである。

第三章 「菜穂子」と古典への接近

堀が求めた△生▽と△死▽の意識はその高まりとして二方に分かれると思う。一つは「菜穂子」であり、他方は晩年の日本古典への接近である。

「菜穂子」は、その主人公が△生きん▽とする意志に目覚めようとする過程が描かれている。登場人物は、菜穂子、夫黒川圭介と幼な友達都築明の三人である。圭介が、三人の中で最も弱い存在であり、ごく世俗な人間として他の二人と対照的である。菜穂子と明はまた別の意味で対照的に描かれている。創作ノートによると、

彼(明のこと―筆者註)の生き方は、彼の死によって一層完成す。夭折者の運命。彼女(菜穂子のこと―筆者註)の生は、彼女の耐えた生によって一層完成す。生者の運命。

この二者の対立は、そのまま芥川と堀を思いおこす。芥川の△死▽を如何に見るか、卒論の龍之介論に終らない堀の課題の流れがはっきりと現われている。この二つの対立の意識こそ、その答えなのではないだろうか。△菜穂子▽は、△いはば、生の根源に向はうとする無邪気な心の傾き▽を描いた作品であると「覚書」の中に書いているように、この作品には、△生の根源▽へ近づこうとする堀自身が投影されている。△明▽の独白の部分に

「このまんま死んで行つたらさぞ好い氣持だらうな。」「しかし、お前ももっと生きなければならんぞ。」「どうみて生きなければならぬんだ、こんなに孤独で？こんなに空しくって？」

「それがおれの運命だとしたらしやうがない。」

とある。これらは許婚者を失つた時の堀の氣持ちではなかつたかと思われる。独自の運命以下の生と対照に、運命以上の生に目覚めようとするのが△菜穂子▽である。「風立ちぬ」以来のテーマの高まりが、△圭介▽や△明▽の存在によって深まりを加えている。無論、堀自身の△生と死▽の意識の高まりと深まりが裏にあると言えるだろう。

堀の晩年の特徴としてあげられるのが、古典への接近である。これは前に述べたように△生と死▽の意識が向寄せたものである。古典への接近の動機として高田瑞穂氏は

堀を一番強く、古典に向かわしめたものは、その心の師リルケであったことは何人もこれを否定しえない。(「堀辰雄」)

と、リルケを強調されている。一方、谷田昌平氏は、

堀が大和に「切ないほど心を誘はれるやうに」なつたのは、大和が古代の「死」を秘めた自然だからであり、堀における大和はそうした古代の「死」の觀念が今も痛切に感じられる場所だつたからである。(国文学 昭和死年代の堀辰雄)

と、古代が、堀が求めつづけた△死▽を秘めたものであることを強調されている。

古典的なものへのあこがれは、リルケとの出会い以前にも認められる。昭和八年五月の「覚書」(プルウスト覚書)の中でキリコの

「^{トロッペ}戦勝標」の絵を見た時、

一枚の大きなバステルの前までくると、そこに三十分ばかり釘づけされた。(略)そして私にはその苦しさうな古代的静けさのみがひとり真実なもののやうに感じられ、それだけが現代にすっかり根を張ってゐるやうに思へた。(略)私は、今日のすぐれた詩や絵の中で死に瀕してゐるやうに見える静かな古代的美しさをその昨日の生き生きした完全な姿でもって見直したいのだ。(傍点堀 ○印筆者)

と△古代的静けさ▽△古代的美しさ▽に思いを寄せている。古典接近の芽げがあると思う。リルケや後述する文学の根源としてのレクキエムによって古典へ近づいたのではあるが、それ以前の古代的なものへのあこがれを見のがしてはならないだろう。

古典接近の直接的動機を考えると二つに大別される。一つは『風立ちぬ』以来の主題であつた△われわれの生はわれわれの運命以上のものであること▽を展開させるのに、王朝時代の作品に共鳴を得たことである。△節子▽の中に見い出された、宿命の中で素直に生きた女性の魅力を『蜻蛉日記』や『更級日記』の作者や『靈異記』や『今昔物語』に登場する女性の中に見い出していることによつて明らかである。昭和十二年十二月に発表した作品「かげろふ日記」について「七つの手紙」の中で

この(「蜻蛉日記」とこと)中に、われわれの生はわれわれの運命以上のものである事——「風立ちぬ」以来私に課せられてゐる一つの主題の發展が思ひがけず此処において可能であるかも知れないのを見、私は何か胸がわくわくするのを覚えてゐる位です。

と記しているように古典への共鳴ぶりが解かる。

もう一つの直接動機としてあげ得るのは、人生と死Vの意識の大きなポイントとなった「レクキエム」である。それはリルケの影響とも云えるものである。「レクキエム」は単に作品としての鎮魂歌というものに止まらなかった。単に鎮魂歌として堀がとらえたのならば、古典接近とは結びつかないであろう。一切のよき文学の底辺に厳としてあるVもの、文学の何らか本質的なものを「レクキエム」の中に感じ、そのレクキエムを古典の中に見出したからこそ古典に向ったといえる。文学の本質的なものを古典の中に認めたからこそ古典に接近したのである。これらのことは堀自身の言葉によつてうかがわれる。

(1) 死を嘆し、魂を鎮めるためにはあくまでもその死者の心と一つになり切らずにはをられぬところに万葉びとの万葉びとらしいところがあったのではないか……
人々に魂の平安をもたらす何かレクキエム的な心にしみ入るやうなものが、一切のよき文学の底辺には厳としてあるべきだと信じております。

付記

折口先生の説によると、絳景歌といふものは先づ最初旅中鎮魂の作であった。(略)すべて日本の絳景歌の中にはさふいふ初期のレクキエムの要素がほのかに痕を止めてゐるのである。(「伊勢物語」など)

(2) 僕は数年前、信濃の山のなかでさまざま人の死を悲しみながら、リルケの「レクキエム」をはじめて手にしてああ詩といふものはかふいふものだったのかとしみじみ覚ったことがあり

ました。——そのときからまた二、三年たち、或日万葉集に読みふけてゐるうちに一聯の挽歌に出逢ひ、ああ此処にもかういふものがあつたのかとおもひながら、なんだかちつとしてゐられないやうな気もちがし出しました。それから僕は徐かに古代の文化に心をひそめるやうになりました。それまでは信濃の国だけありさへすればいいやうな気のでるた僕はいつしかまだすこしも知らない大和の国に切ないほど心を誘はれるやうになつて来ました。(「古墳」)

(1)の引用文のように、古典接近に折口信夫博士の影響も見のげせないが、直接の動機としてはあげない。

文学の本質としてのレクキエムVを求めたが故の古典接近であるが、堀が持ち続けてきた人生と死Vの意識が、堀の心を古典にむかわせたのだと思う。堀の人生と死Vの意識には一章、二章でのべたように、芥川、リルケが大きな影響を与えてきているが、これはあくまで、堀の中にあるものを確信させたものである。堀の中に深く根ざした人生と死Vの意識が、堀を古典に接近させたのだと言える。

結 び

堀の師である芥川とリルケは死に先だつところの苦しい死苦に悩まされ続けた。同時に、死苦の只中において生を感じていた人々であった。堀はそれらを客観視することによって生に目覚め、生を確信し、深めたと言える。人生のスタートにおいてすでに文学の師芥川の死を客観視しなければならなかった堀なのである。堀が作家として生きがために課せられた宿命のようなものがそこにあり、堀

の人生と死の意識の根源がそこにある。

堀の「ブルウスト雑記」に記されたリヴィエルの言葉に彼の宿命のごくと思われる愛動的なるものを能動的なるものへ換へんとする努力

とある。この言葉は堀の生涯にあてはまるのではなからうか。文学の出発における師の自殺という宿命——受身的なものを堀自身人生さんVという能動的なものへと換えたのが堀なのである。「聖家族」より「美しい村」、「風立ちぬ」より「菜穂子」へとより能動的な生へと努力が続けられている。

さまざまな人の死にかこまれ、また常に死のすぐ隣にありながら不思議なほどに底力のある生命力を感じる作家としての堀の生の泉が堀自身の中に作りつけられたと言える。

そして「古典」を見つめる堀の中には運命以上の永遠の生の意識がもえつつづけていたと思うのである。

参 考 文 献

- 堀辰雄全集 全十巻 角川書店
- 堀辰雄詩集 福永武彦編 弥生書房
- 堀辰雄 近代文学鑑賞講座 第十四巻 中村真一郎編 角川書店
- 人と作品 福田清人 清水書院
- 現代のエスブック 至文堂
- 遠藤周作 一古堂書店
- 写真作家伝叢書5 高田瑞穂 明治書院
- 堀辰雄追悼号 「文芸」 河出書房
- 堀辰雄読本 「文芸」
- 文学と詩精神 村松剛 南北社

作家の詩どころ 人と文学 河上徹太郎 桜楓社

堀辰雄論 小久保実 麦書房

現代作家論全集 佐々木基一・谷田昌平 五月書房

昭和十年代の文学 「国文学」 学燈社

作品論への招待 「文芸」

芥川龍之介研究図書館「解釈と鑑賞」 至文堂

国語と国文学 昭和四三年七月号 東京大学国試国文学会

「死者の書」 折口信夫全集第24巻 中央公論社

芥川龍之介集 日本文学全集第22巻 新潮社

芥川龍之介 人と作品 福田清人 清水書院

人生論読本第2巻 角川書店

文芸読本 河出書房

「文芸的な余りに文芸的な」芥川龍之介 新潮文庫

「西方の人」

芥川龍之介の世界 中村真一郎 角川文庫

芥川龍之介の魅力 「国文学」 学燈社

リルケ詩集 富士川英郎訳 新潮文庫

星野慎一訳 岩波文庫

リルケ全集3 高安国世訳 弥生書房

マルテの手記・ロダン リルケ 新潮社

我が愛する詩人の伝記 室生犀星 角川文庫

龍之介人生のいと 現代文学研究会編 新興出版社

作家論Ⅱ 伊藤整 角川文庫

堀辰雄・妻への手紙 堀多恵子編 新潮文庫

立原道造全集第四巻 角川書店